

2004年11月4日

白馬村長
福島信行殿

白馬村民フォーラム
代表 渡邊俊夫

提言書

去る10月18日、「中心街・商店街を考える～集い・賑わい・触れ合い」をテーマに、第10回白馬村民フォーラムを開催しました。尚、参加者は5名でした。

シャッター街となりつつある駅前をはじめとする商店街、希薄となった地域住民の触れ合い、この2点はこれからの地域のあり方を私たちに問うています。村内における商店の利用動態を調べるアンケート結果などに基づき、限られた時間での真剣な論議をいたしました。

議論の結果を下記のように提言として纏めましたので、ここにご報告申し上げます。

地元商店は信頼性、地域性、専門性が求められている

店主の豊富な知識、地域ならではの商品、店ならではの商品の3点が求められている。利便性に富む立地場所は必ずしも必須条件とはならず、「あの店に行けば大丈夫」という、消費者に対する高い安心感を与えることができる接客が伴う個性のある商店が必要とされている。このような商店が連なっていくことで相乗的な効果として商店街が賑わいを取り戻す。尚、各地区に見られる空き店舗の有効活用を積極的に図っていくことは急務である。

公共サービスは人の集まる場所に合わせる

役場、銀行、郵便局、などの住民に対する公共的なサービスは常に利便性が求められる。このようなサービスを受けられる場所は人が日常的に集まるところにあるべきであり、車優先社会となった現在では大駐車場を併設した大型複合店舗近辺がその場所として該当する。しかし、村の将来像を模索する中において車優先の社会のみを社会基盤の前提とすることなく、村が有する優れた自然環境を保全する立場から公共交通網の整備をも前提として新たな場所を創造していく必要もある。

地域は触れ合いを求めている

賑わいは賑わいを誘い、触れ合いは触れ合いを誘う。「この地域に住んでよかった」「この地域を誇りに思う」と実感できるのは様々な触れ合いの場面があればこそである。嘗て人が日常的に行き交う場所は、駅であり、生鮮品を扱う店が連なる商店街であった。そこは触れ合いの場所であり、声を掛け合って話をする場所、すなわち様々な情報を交換できる場所でもあった。空き店舗を安価で若者たちに積極的に貸し出す、露天の市場を定期開催する、長居できる居心地の良い公共の場の拡充を図る、未就学児とお年寄りたちが交流できる場所を作る、など皆で協力すれば新たな触れ合い、賑わいを作り出すことができる。今こそ、気軽な住民の触れ合いの場所を新しい観点から意識して創造していく必要がある。